

平成二十四年四月八日 入塾式記念講演

「和敬塾、これからの五十年——二十一世紀における日本の場所主義——」

公益財団法人和敬塾 理事長 前川 正雄

おはようございます（塾生「おはようございませう」と返事）。ご来賓の皆様、本日はありがとうございます。新入塾生の諸君、おめでとうございます。「和敬塾、これからの五十年」という題でお話しすることになっていますが、これからの五十年の前に、まず和敬塾がどういう経緯で設立されたかという話をしたいと思います。

和敬塾の趣旨に「共同生活を通じた人間形成」と書いてありますが、この文言には由来があります。昭和二十年代後半、当時の和敬塾創立メンバーは当時の日本の現状を非常に憂慮して「共同生活を通じた人間形成」ということを目指そうとした。これは何をいつているかというのと、「共同体をもう一回つくろう」ということですね。なぜかというのと、和敬塾創立メンバーは共同体が壊れたことを強く意識していたわけです。どうして共同体が壊れたかといいますと、GHQのマッカーサーが日本の共同体をつぶすためにいろいろな政策を行

ったからであります。

なぜマッカーサーは日本の共同体をつぶそうとしたのか。マッカーサーは日本の共同体にさんざん苦しめられたわけです。沖繩の戦いでは米軍も多くの死傷者を出しました。硫黄島の戦いでは日本軍を上回る損害を出しております。もし硫黄島のよいうなことがもう一回あつたら、アメリカは戦争を続けることができなかつただろうといわれております。硫黄島の戦いだけでイラク・アフガニスタンの何倍もの損害を出しましたから。そのぐらい追いつめられたわけです。マッカーサーにしてみれば、数年間のエンバルゴ (Oil Embargo 石油禁輸 ※註) で追いつめられていた日本が、そんなにもつはずがない。なぜもつたんだらうか、と思うわけです。その秘密が日本の共同体の強さだったんですね。そこでマッカーサーは、共同体をいかにつぶすかということを経験の第一義に掲げたわけですね。

そのためにどうしたかといいますと、まずひとつは家族制度をつぶしました。家族制度はマッカーサーによってすっかり変えられてしまいました。今の核家族の問題はその結果であります。

もうひとつは学校教育を徹底的につぶしました。当時の旧制高校を全部廃止したんですね。旧制高校では実学の勉強は一切しないのです。経済も工学も技術も勉強しない。三年間ただ寮生活する。寮生活の中で日本のリーダーが育っていった事実があります。したがって、当時の第一高等学校では、寮の中で不始末があると寮長が寮生を退寮にする。退寮になったから、学校は退学を命ずる。そのぐらい寮生活というのは重みをもっていたわけですね。共同生活を通して人間をつくっていくんだ、ここから日本のリーダーが出ていくんだ、そういう感じを強くもっていたわけですね。

それからもうひとつ、日本の産業をつぶしました。これは労働組合を徹底的にバツ

クアップした。当時、大きなストライキが何回も起きて、日本の経済を脅かした。この三つが、日本の共同体をつぶすためにマッকারサーがやった、実際の政策でありました。

マッকারサー以後、実学の勉強はせずに哲学とか宗教とか文学だけやって三年間を過ごすと教育は、日本の中に一切なくなってしまう。それを憂慮してできあがったのが和敬塾であります。したがって、和敬塾の「共同生活を通じた人間形成」に近いのは日本の旧制高校の生活です。実はそれは江戸時代に生まれた日本型の教育システムなんです。和敬塾はこれをもういちど元に戻そうという趣旨なんです。私の考えでは、この五十年間できちつと元に戻った感じがしています。ついでに申しますと、労働組合に関して、春闘というものが終わったのはいつ頃だったでしょう。もうだいぶ前ですね。すっかり終わりました。日教組も最近ほほとんど壊滅状態になっております。これも、日本の社会が正常な方向に戻ってきた、伝統の日本の文化に戻ってきたことのあらわれだと思っております。今はおそらく家庭生活が一番の問題だろうと思えます。最近では家族の絆ということが非常にいわ

れておりますが、これもやはりもういちど大きな見直しがあるものと考えております。あとは民主教育の問題ですね。民主教育はマッকারサーのもたらした害悪の中で最大のものだと思います。

ここまでお話ししたとおり、日本の教育をもう一度きちつと日本の文化に根差したものに戻していこうということが和敬塾の基盤にあるわけです。われわれとしては、「共同生活を通じた人間形成」というのは、人が教えられるものではなく、また学校で習うものでもないのです。ひとつの共同体をつくっていく段階において、共同体の中にある個が自分たちの共同生活を通して学んでいくという過程なんです。したがってこれは非常に時間がかかるわけです。と同時に、共同体を通して共同体を深く知る、己を知る、人を知る。これが日本の旧制高校の教育であって、それ以外のもので一切なかったわけです。和敬塾もそういう考えから、共同体を通して己を知ろう、人を知ろう、社会を知ろうということとを五十年間つづけてきた。最近、和敬塾は日本の社会の中で見直されております。大きな脚光を浴びるようになってきたことは、日本の教育界にとつて喜ばしいことだと思っております。こういうことによつ

て、日本は伝統的な文化に帰っていくことになると思います。

マッকারサーはアメリカの教育文化を日本に押しつけて、日本の文化を破壊しようとしたわけですが、これは六十年間たつと普通の国ならばもの見事に破壊されつくしてしまいます。ところが、日本の場合は六十年たつて元に戻ってきた。日本は文化の復元力が非常に強い国だといえると思います。他の植民地はほとんどメタメタにやられてしまっているわけです。そこが、日本の文化が非常に深く、広く、大きなものであり、六十年間にわたつて表面を荒らされた程度では左右されない、根の深いものをもっているということのあらわれではないかと考えております。

さて、その中でいったいこれからの五十年間、何をしたいか。そう考えてみますと、世界は今いったいどうなっているか、ということが問題になってくるわけですね。世界はアメリカ型のグローバルシステムを押しつけられた結果、それぞれの文化を破壊されつくしたという印象を私は持っております。日本はアメリカの教育文化を持ちこまれてもメタメタにはならず、もういちど元の日本文化の教育が起きあがってききましたが、普通はそこで潰されてし

まうわけです。今、教育だけでなく、あらゆるところでそれが起きている。それがグローバリズムといわれているものの正体であります。

ヨーロッパやアメリカでは、ほとんど経済的にも産業的にも終わりが近づいています。私は製造業をやっております、製造業しか知りませんが、この十年間スイスで生活して見まして、ここから見ますと欧米の製造業はまさに壊滅状態ですね。社会もほとんど同じように崩壊しています。例えば、昨年（二〇一一年）の東日本大震災のときに欧米人が一番びつくりしたのは略奪がなかったということですね。日本人から見れば、あそこで略奪が起きるはずがないわけです。ところが欧米の場合は、これはもう略奪しないほうがどうかしているわけです。現に、ロンドンでもブラッセルでもパリでも、最近、あらゆるところで暴動や略奪を目にします。暴動や略奪は一定の主義主張があるわけではなくて、社会全体のフラストレーションなのです。これが欧米の現状であります。欧米の文化はいよいよこれで終焉を迎えました。ちょうど、二十世紀の初めにシュペングラが『西洋の没落』という本を書き、十九世紀の終わりにニーチェが「神は死んだ」と言ったよ

うに、百年たつていよいよ本物の崩壊が始まったのを目の当たりにしているという感じを持っております。

一方、スイスから日本を見てみますと、先ほど申しあげたようにますます正常化してきています。教育システム、春闘、社会や家族の絆といったものが大きな話題になっていくのを見ても、正常な方向に動いている、まともな方向に回帰していると思っております。だけど政治がおかしいではないか、役人がおかしいではないかとおっしゃるかもしれませんが、実は行政とか政治とかいう時代は二十世紀で終わったんですね。もちろん完全にはなくならないのですが、主軸はそこにはないということです。もう一度、日本文化を中心として、日本の文明をあらゆるところで興していくというのが主軸であって、行政と政治家がそれをリードできない時代になってきたというのが、現在の政治と行政の実態ではないかと思えます。ですから我々は、時代が変わったのだということをしつかり頭において、二十世紀のような大きな期待を政治と行政に寄せないほうがよいのではないか。ご存じのとおり、ヨーロッパとアメリカも政治と行政は完全にマヒ状態です。おそらく、政治と行政というものは

二十世紀でひとつの時代を終えたのだろう。と同時に、欧米で発展してきた民主主義というものも終わったのだろうと思っております。現に、日本の文化というものは、古来、民主主義で運営されたためしは一度もないわけです。これからもう一度、日本の運営方法に帰るのだと思います。回帰がだんだん始まってきている。これが我々が目の当たりにしている日本の現実なのです。こういうものは、ヨーロッパの現実を見ながら日本を見る、日本の現実を見ながらヨーロッパを見ると、非常によくわかるのです。皆さんもぜひそういう目で世界を見てみてください。そのときに、立っているポジションはどこなのだろうか、そのポジションをもっと深めるためにまわりを見る、こういうアプローチの仕方が大事だろうと思えます。

いずれ日本は世界の中で生きていくしかないわけです。グローバリズムとかそういういったものではなく、世界の中で皆と一緒に生きていく。そのときに、いったい我々はどこに立っているかというところをもう一度しっかり頭に入れていただく。これが君たち新入塾生諸君に課せられた大きな使命ではないかと、私は思っています。

だいたい私の話はそういうことなので
すが、何か質問があればどうぞ試みてく
ださい。議論が出やすいように激しい話を
しましたから、ぜひひとつよろしくお願
いします。

質疑応答

●質問（東寮四年・石丸君）

民主主義の時代が終わり、二十一世紀の
世に政治・行政はないとおっしゃいました
が、二十一世紀の政治や行政はどのような
方向にむかうべきだと考えておられます
か。

■回答

これは、他の国は他のやり方をするかも
しれませんが、日本は日本古来の運営の仕
方に戻っていくと思います。それは何かと
いうと、「場所主義」という言葉だと思う
のです。「場所」というのは非常にむずか
しい概念なのですが、例えば、ひとつの木
でも草でも生存している範囲というもの
がありますね。その範囲の土壌から水から
空気から、すべてのものがその木なり草な
りを生きさせている、それによって生きて
いるというのが「場所」という概念です。

私は、日本人には各々の共同体、生かさ
れている「場所」があるのだと考えていま
す。その「場所」の中でどういう運営をし
ていくかというのが「場所主義」です。こ
れはやはり選挙して選ばれるという性質
のものではないわけです。例えば日本の村

落共同体で水争いが起きたとき、どう解決
したかというところ、三日三晩、徹底的に議論
をする。そうすると、おのずと決まるとこ
ろに決まってくる。全員が合意するのです。
しかも「多数決」ではありません。多数決
とは不満分子がいるということです。

「場所主義」は日本の文化ですから、日
本ではそういう「場所的」な解決方法しか
ないだろうと思っています。したがって、
日本では欧米由来の民主主義が一番むか
ないシステムだということがいえると思
います。

●質問（北寮三年・黒坂君）

日本の政治・行政は主役でなくなつたと
おっしゃっていましたが、最近なかなか力
を持っているといいますが、流行りと申し
ますか、「大阪維新の会」のような新しく
出てきた政治のあり方は、やはり一時の流
行りに過ぎないのでしょうか。

■回答

こういう問題が出てきたこと自体が、政
治の劣化をあらわしていると思いますね。
おそらく、二十世紀までの政治はここで一
挙に崩壊に向かうと思います。その代わり、
そういう新しい政治が出てくる可能性は

充分あると思いますが、十九世紀や二十世紀に政治が占めたようなポジションは二度と与えられないだろうと思っています。

●質問（北寮三年・黒坂君）

もうひとつ質問よろしいでしょうか。日本では、家族の絆、社会の絆はだんだん正常化してくるのではないかとおっしゃいましたが、一方で、現在、孤独死などが大きな問題になっています。それらも今後、解決されていくのでしょうか。

■回答

これは非常に大きな問題なのですが、マッকারサー憲法の結果だろうと思うんです。昔はこういうことはなかったわけです。『檀山節考』（深沢七郎）という小説がありましたね。昔はじいさんとばあさんが川のほとりに自分で引越して、そこにあるものを食べながら死を迎えた。これが日本の「場所的」な死なのですね。これはおそらく、何千年来つづいている日本の一番ハッピーな死に方だと思います。しかし、そういう死を考えない、生だけでもって成り立っているという妄想を持たせた時代が、この六十年間続いてきている。これもまたマッকারサー憲法の害毒の一番大きな部

分だと私は思うんですね。生があって初めて死がある、死を感じた時に生を感じる、というのではないと、日本の孤独死というのは治らない。おそらく、そういうたようなことに影響を受けた人がそういうかたちで終わっていったあと、日本本来の死に方というのがもういちど見直される時代が来ます。私はもうすぐだと思えます。孤独死ということが問題になること自体が、回帰のスタートになっているんです。

●質問（乾寮一年・大脇君）

コミュニティの破壊というのがありますが、どこかどういったコミュニティをマッকারサーが破壊しようとしたのか知りたいです。

■回答

まずひとつは、家族のコミュニティを破壊するための家族法の改定ですね。それから学校のコミュニティを破壊するための旧制高校の閉鎖ですね。それに社会コミュニティを崩すための労働組合の強化です。この三つだと思います。

●質問（乾寮一年・大脇君）

もうひとつ質問があります。日本の文化

というのがキーワードとしてあると思うのですが、もう少し具体的に教えていただきたいです。理事長にとって日本の文化とは、ひと言でいってどういうものですか。

■回答

これはひと言ではなかなかいえないけれども、まず神道がありますよね。それに仏教が入ってきて、平安のダイナミズムというのが出てくる。その平安のダイナミズムに、中国から禅宗が入ってきて、鎌倉ダイナミズムである武士道や茶道といったものができあがってくる。それに同じく中国の儒教が入ってきて、江戸のダイナミズムである日本の国学がスタートする。それに西洋思想、西洋技術が入って、明治のダイナミズムが出てくる。それにまた大東亜戦争が始まって、新しい二十一世紀の平安ダイナミズムがこれから始まるうとして

いる。これは全部、日本の文化という地盤に種が外から来て、それで咲いたものなんです。これが日本の「場所主義」のやり方で、新しいものをどんどん「場所」の中に同化していくのです。この「場所」とは何なのか、これが君たちに和敬塾で四年間しっかりと議論してもらおう一番大事なものだろう

と思っています。

●質問（北寮四年・小山君）

これから原点復帰していくとおっしゃっていましたが、私の考えから申しますと、やはり自分たちで動かなければ、待ちの状態では変わっていかないと思います。理事長は、塾生にどのように動いてほしいという考えはございますか。ご意見を聞かせていただきたいと思います。

■回答

まず目の前の問題では、マッカーサーの三つの政策について原点復帰があると思います。教育制度に家族制度、社会システムそのものをもう一度日本らしい原点に戻していく。戻していくのは、誰かに言われて戻すのではなく、おそらく今の若い君たち自身が行動していると、実は戻っていくんだということだと思います。「戻していく」という自発的なものではなくて、問題意識をもって行動したら戻っていくという、他力的なものだと思うんですね。

●質問（北寮四年・小山君）

自分で問題意識をもって行動していくことが大事だということですか。

■回答

それ以外にないです。その問題意識と、どうやって行動するかということや学ぶのが「共同生活を通じた人間形成」なんです。ぜひ和敬塾の四年間でやってもらいたいと思います。

●質問（東寮一年・鹿山君）

民主主義が衰退し、昔のやり方に戻るとおっしゃいましたが、それは一九六〇年代とか七〇年代とかの共産主義や社会主義とはちがうものなのでしょうか。また「場所主義」に復帰するとおっしゃいましたが、それを広める通信手段はあるのでしょうか。アラブでインターネットが民主主義を広めたような、「場所主義」を広める外部的な要素は今のところみつかっているのでしょうか。

■回答

まず「場所主義」を広めるというのはできないと思います。「場所」というのは人智を超えたものです。これを人間がどうこうすることはできない。どうこうすることができると思った欧米が、崩壊を始めています。そうじゃないんです。「場所」に順

応して生きていく、これが日本古来のやり方であり、生物というものは本来「場所」に合わせて生きのびてきました。「場所主義」では、いろいろな外部の要因が入ってきても、それを全部ひっくるめてまた新しい「場所」を創っていきます。外からの情報で新しい「場所」を創るのではなく、自分で自分の「場所」を深く掘ることによって「場所」を新しくしていくのです。新しいものは、他にあるのではなく、自分の「場所」の中にあるのです。そういうやり方が二十一世紀の日本には必要なんです。

君たちにはぜひ、大東亜戦争以後の日本の歴史を充分に頭に入れて、いったい何を議論すべきなのか、何を指すべきなのか、何を失ったのか、何を戻さなければいけないのか、内部で議論を進めてもらいたいと思います。

●質問（西寮三年・上橋君）

これまで和敬塾は共同体をつくるという面を重視してやってきたと思うのですが、これからの和敬塾は時代のニーズに合わせて変わっていくべきなのか、それとも変わらないでいるべきなのか、理事長のお考えを教えてくださいませんか。

■ 回答

私は民主主義というものの最大の欠陥は、自分中心に考えることなのだろうと思います。そうではなく、「場所」を中心に考えてみる。「場所」から自分を見てみる。それはどういうことかというところ、他人の言っていることをよく聞いてみる。それからもう一回、自分を外から見てみる。こういうことが「場所主義」なわけです。日本はこういう古来のやり方にもう一度帰っていくことになると思うんですね。

その場合、「己とは何か」という議論はいくらやってもエンドレスなんだね。そうじゃなくて、「自分は何のために生まれたきたのか」「何をするために生を受けたのか」、このところを中心においてもいい。「自分とは何ぞや」という考えが行き止まったところが、ニーチェと、シュペンングラーの『西洋の没落』なわけですね。それでは答えは出ないんです。自分中心ではダメなんです。「場所」の中でいったい自分の使命とは何なのかを、ぜひ考えていただきたい。

● 質問（南寮三年・平嶋君）

戦前の家族法がマツカーサーに否定されたことよって家族関係が失われたと

おっしゃいましたが、そもそもそのような家族法がないと存続できないような家族制度は自然な共同体といえるのでしょうか。

■ 回答

私は十九世紀の日本に帰れとっているわけではないんです。日本の文化は十九世紀の頃から進化しており、二十一世紀には二十一世紀の日本の文化がありますから、それをベースに二十一世紀の家族を考えるべきだと思うんです。もう二十世紀や十九世紀の家族に帰ることはできない。今はこれを考える時期に来ていると思うんですね。その場合、二十一世紀の家族は、二十世紀の家族とは——特にマツカーサーがつくった家族法の家族とは——明らかに異質なものになるだろうと思います。それは何なのかと訊かれても、今の私にはわからんけども、それは日本古来の「場所主義」から出てくる二十一世紀の家族法だと思えます。それこそ、三日三晩、徹底的に議論をして合意を出せばいいでしょう。

● 質問（巽寮修士一年・鎌田君）

「場所主義」の話が出てくるのですが、「場所主義」と聞くとどうしても小さくま

とまるイメージがあります。これまでの「成長」路線からはちよつとちがうところに行くのかなという感じがするのですが、いかがでしょうか。

■ 回答

成長というものを主体に考えた二十世紀は行き止まってきたわけです。そうすると、それに代わるものがなければいけないわけですね。なぜ行き止まったのか。それこそ、我々が生かされている「場所」を越えたことをやった結果です。だからもう一回、我々が生かされている「場所」を深く掘ってみよう、広く見てみよう、というのが「場所主義」です。

実は「場所」というのは西田哲学の言葉です（西田幾多郎にしたらろう、一八七〇年〜一九四五年。哲学者、京都学派の創始者）。これは非常に深い言葉なんです。おそらく旧制高校の議題は西田哲学だっただろうと思います。そういうものをもう一度、君たちに和敬塾の中で議論してもらいたいわけです。いったい「場所主義」とは何なのか、西田はなぜここでもってこういうことを言ったのか。これはやはり人に教えてもらうものではないんだよね。自分で発見するものなんです。教えてもらうも

のは高が知れています。自分で発見するものが大きいんです。それをできるのがリーダーであり、日本の二十一世紀を引っ張っていくんです。こういう気概をぜひ持ってもらいたいと思います。

●質問（南寮三年・櫻井君）

二十一世紀、国内的には日本文化は回帰するというお話でしたが、対外的には日本はどのような立場になるのかお聞きしたいです。それと、理事長の民主主義の定義を教えてください。

■回答

対外的には、二十一世紀は日本にとって望ましい世紀になるだろうと思っております。なぜならば、政治・行政は、なくなりはないけれどもそのとき必要なスケールにスケールダウンする。と同時に、金融や流通もそれに必要な分だけスケールダウンする。いま金融は肥大化していますね。すると、何が伸びるかというところ、製造業が伸びるわけです。現に日本は製造業の輸出で食っています。製造業の中核を担う人間はおそらく数千人以上かいないと思います。ですから、日本の人口が五千万人になるとか三千万人になるとかかわっています。

全然問題ないと思うんですね。もし五千万人になるとエネルギーから食品から半分になるし、輸出は変わらないし、日本はものすごく力のある国にもう一度戻っていくだろうと思いますね。しかも日本の輸出は、ご存じのように価格競争力で出ているのではないんです。あれだけ円高になっても輸出は止まらないわけです。なぜか。価格競争製品ではないからなんだよね。日本から買わないと、他に付くところがないわけです。例えばアメリカの航空機会社のボーイングは、三分の一は日本製です。他で買えないんですね。エレクトロニクスもそうです。iPhoneなんて三〇%が日本製です。そういう意味では、日本の製造業のハイテク性というのは、実は「場所主義」なんです。日本の文化から出てくるハイテクなものです。ですから根が非常に深いんですね。そういう意味で、二十一世紀の日本というのは、ものすごく有利になることはまちがいないと思います。

もうひとつのご質問ですが、民主主義というのとはどういうレベルの低い政治システムだと思いませんか。少なくとも「場所主義」から見ると、比較にならないくらい劣化した政治システムです。もう賞味期限はとっくに過ぎていると考えていいのではないのでしょうか。

●質問（西寮二年・石坂君）

民主主義から「場所主義」への転換はどのようにして行われるのかお教えてください。

■回答

日本で民主主義が終わったのは一九七〇年代だと思いませんか。大量生産でガンガンやっていたのがオイルショックで終わったと同時に、民主主義も終わりました。大量生産・大量消費の時代は民主主義でも機能しましたが、それ以後は政治でも全然機能していません。というよりも、政治の機能する場所がものすごく小さくなっているといえます。それでは、いったい日本の文化がのっかっている「場所」はどこなのか。我々はもう一回、日本の文化というものに深く思いを致す必要があると思います。

●質問（西寮二年・石坂君）

今の行政システムが崩壊するとおっしゃいましたが、崩壊したのちに日本を指導していく行政上のリーダーや指導者はどういったものになるのでしょうか。

■ 回答

おそらく、政治・行政がいま占めているポジションからランクダウンすることはまちがいないと思うんですね。しかもそういう下位のレベルにランクダウンすると思います。というのは、すでに二十世紀の政治は国際的に不要な部分がほとんどになってしまった。今、フランスやアメリカで選挙が始まっていますね。あれ、争点は何ですか。そのくらい政治というのは劣化しているわけです。全世界で政治の劣化、崩壊が——といってもなくなるわけではないんだけど——ランクダウンが始まっているとみてよいんじゃないでしょうか。どこまで落ちるか興味深いですね。ただし、政治がどれだけ劣化しても、国民生活にはあまり関係ないというのが一九七〇年代以降の日本の現状だと思うんですね。ですから、あまり悲観しなくていいと思うんです。そのくらい、日本の政治・行政のウェイトが落ちているといっていると思います。

● 質問（西寮二年・石坂君）

もうひとつだけお聞きしたいのですが、下位の階層に落ちた政治・行政が、下位の

階層になりながらも依然として生活の管理を担っていくのか、あるいはそれにとつてかわる新しい指導者が現れるのか、お教え願いたいのですが。

■ 回答

おそらく「場所主義」からいうと、そういうリーダーは必要ないんですね。でも「場所」のリーダーは必要なんです。「場所」と「場所」とを連携するリーダーもまた必要なのです。そういうかたちで政治と行政が進んでいくだろうと思います。これは革命的变化ですね。

では、「場所」のリーダーをどうやってつくるか。「場所」のリーダーはどういう努力でもって出てくるだろうか。こういうことを、ぜひ和敬塾の共同生活を通して身につけてもらいたいです。リーダーは共同生活からしか出てきません。

● 質問（乾寮四年・伊藤君）

「場所主義」は、身体的実在としての身体「場所」としては非常によい考えだと思いますが、電脳社会と申しますか、身体によらない、「場所」によらない平板な社会というものが今後はより開けていくと思います。そういう社会についてどのような

に思われるのかお聞かせください。

■ 回答

「場所」によらない社会というのはどんどん減っていくと思うんですね。二十一世紀は生物の社会が中心となって、非生物的社会はどんどん力を失っていくと思います。その中に電脳社会もあります。今までのデータをいくらいじっても新しいものは生まれません。こういうやり方は二十世紀で終わりました。生物的社会とは、「場所的」な社会のことです。新しいものは「場所」の中で自分で発見するより方法はないのです。このとき、電脳社会は何の役にも立ちません。

その非生物的社会現象のひとつが「孤独死」だと思います。孤独死が好きならばそれでいいでしょうが、日本人は誰も孤独死がいいとは思っていませんね。そうすると、日本全体が孤独死をなくすような「場所」へ向かうはずなんです。これが私のいっている「場所主義」なんです。その場合に、行政・政治は何ら力はないですね。力があるのは「場所主義」です。「場所主義」は日本文化の中にあるわけですから、もう一度それを発見していくことが我々二十一世紀の日本人にとって非常に大事

なところだと思っんですね。

●質問（南寮一年・小林君）

「場所主義」への転換が進むだろうとおっしゃいましたが、今の日本において民主主義は、憲法でも「人類普遍の原理」と前文にあるとおり、最高の原理として日本国民に根づいていると思います。それを一部の人が場所主義、場所主義と言っているけれども、日本国民は一億三千万人近くいるわけですから、そんなに簡単に民主主義が衰退していく、国民から民主主義的な考えがなくなっていくということがあるでしょうか。

■回答

まず、その憲法がマッカーサーが押しつけた憲法だということですね。これは日本の「場所主義」から出たものではない。いま、家族、教育、産業の分野で原点に帰りはじめている。その原点が日本の「場所主義」なんですね。

それからもうひとつ、時代の転換というのはね、三年や五年でできるものではないんだよね。ニーチェが「神は死んだ」と言ったのは十九世紀末、シュペンゲラーが「西洋は没落した」と言ったのは二十世紀初頭ですからね。それが現実になったのは

二十世紀末です。時代の転換というのは五十年、百年はかかる。マッカーサー憲法が破綻するにも五十年かかっていますよね。やはり五十年、百年というスパンで考えないといけない。

●質問（南寮一年・小林君）

ですが、日本国民は民主主義を半ば崇拝しているように思えますが、いかがでしょうか。

■回答

それはだまされているんだね（笑）。五十年以上経っても気づかせないダマシのテクニックが、植民地主義なんですね。

●質問（南寮一年・小林君）

そこから脱却する手段はありますか。

■回答

五十年、百年したら、あーだまされたなあ、と。今、私は外から見ている、だまされたと感じはじめている日本人が非常に多い気がするんだよね。

●質問（西寮三年・安田君）

日本においては「場所主義」に回帰して

いくということでしたが、グローバル化の中で他国との関係というのはこれから切っても切れないものになると思います。その中で、「場所主義」の感覚というのは世界的にみて共通のものなのか、それともちがうものがあるのか、教えてもらえますでしょうか。

■回答

最近、ヨーロッパの学会とかに呼ばれる機会が増えていますが、ほとんど日本の「場所」について話してくれというんですね。ですからヨーロッパのほうが、日本の「場所」という問題に非常に興味をもって理解しはじめています。今度スイスに帰るときも、チューリッヒ大学でセミナーに出てくれというので出るので、これも「場所」について話してくれといわれています。

我々はもう一度、日本の「場所」を、日本文化を見直していかないといけないんじゃないかなという気がします。おそらくヨーロッパは、「場所」を理解すればするほど、これはとても手に負えない問題だと思ふにちがいない。現にそういつている人がいっぱいいます。我々はそういうことを抜きにして「場所」の中にどっぷり浸かっているながら、いったい「場所」とは何ぞや

という議論をしていない。これは大きなギャップですね。ぜひ、日本の文化の中で「場所」がどういう位置を占めているのか、こういう議論を和敬塾の中で進めていただければよいと思います。

●質問（北寮四年・小山君）

「場所主義」というのは地域主義とはちがうのでしょうか。似ているのかなと思っただけですが。

■回答

いや、「場所」というのは時間と空間を合成したものなんです。時間と空間は合成できないよね。最近の物理学では時間と空間を合成した科学というのが、スタートしています。「場所主義」というのは、科学と哲学と文化が一緒になった世界なんだよね。

日本のすごいところは、それを古来やっているということなんです。それにそって、空論ではなく、社会の実体をつくってきた。考え方の基準にしてきた。行動の規範にしてきた。これが日本のすごいところなんだよね。そのへんのところは、先ほどから言っているように、もう一度、和敬塾の中で議論を進めてもらいたいと思います。

す。

おそらく二十一世紀、日本は「場所主義」を中心にあわって世界を巻きこんでいくと思います。というのは、世界に「場所主義」以外の解決策はないんだよね。自信をもって日本が世界に貢献できる唯一のものが「場所主義」だと私は思っています。民主主義は終わったのです。

●質問（北寮四年・小山君）

むしろかしいので意見をお聞きしたいのですが、「場所主義」の具体例は何でしょうか。

■回答

それは西田哲学を読んでみてください（笑）。

●質問（東寮一年・キムビョンヒョン君）

民主主義から「場所主義」に変わると、これによっていま日本が抱えている経済問題を解決できると思っただけで、むしろか、ご意見を聞きたいのですが。

■回答

すでに日本は経済問題を「場所主義」で解決していると思います。現状がそうなっ

ているのです。経済が加速されるのであれば、「場所主義」は大きな力になります。

日本の「場所主義」というのは年々進化していますから。その進化にそって、製造業であればハイテク商品がどんどん出てきているわけです。これは全部「場所主義」です。欧米の管理型社会からは何も出てこないですね。そういう意味では、日本の大会社の時代はすでに終わっているのだと思います。ね。「場所主義」の企業から出てくるハイテク商品は、世界を変えていくだろうと思います。組立産業は、全部、中後進国に移りました。しかし、これに使うハイテク部品はほとんど日本が製造しています。これは二十一世紀に入ってますます定着してきています。

●質問（東寮二年・松下君）

「場所」というのは、例えば自分で好んで選びとって、その「場所」に行くということもあると思います。でも、もともと生まれたときから日本という国にいて、選べない「場所」というのもあると思うんです。もしその「場所」になじめなかったり、あまり帰属意識がなかったり、好きになれなかったりしたときは、どうすべきなのでしょう。

■ 回答

それは孤独死しないんだね。「場所」というのは選べないのですよ。あなた、生まれたときに「場所」を選んで生まれてきた？あなたは死ぬときに「場所」を選んで死にますか？そうじゃないんだよね。もうできあがったところに君がいるわけだから、「場所」というのは選べないのです。もう生と死そのものなんだよね。

そこるところ、西田の本を読んでもらうとハツと思うことがいっぱいあると思うんだよね。だいたい今の若い者はね、ハツと思わなさすぎているんですよ（笑）。もっと勉強しなきゃいけないですよ（笑）。人に聞くのはまだいいけれども、これは全部はわからないなと思ったら、自分でみつけだすということもぜひやってもらいたいんだよね。

● 質問

理事長は民主主義を否定されるということではよろしいでしょうか。

■ 回答

ああ、いいです。

● 質問

それでは、「場所」のリーダーというのはどういう手続きで決めるのですか。

■ 回答

「場所」のリーダーというのは自然に出てくるんだよね。「場所」にいるメンバーが、この問題はあのリーダーだな、あの問題はこのリーダーだな、というふうにならに決まるのが「場所」なのです。だから「場所」というのは、一人がリーダーシップをとるわけではないんですよ。タスクごとに自由にリーダーが決まる。日本は古来、全部そうですね。

それでは、非常に刺激的な話を一年生にしたから、これを機会に議論を進めてもらいたいと思います。どうもありがとうございます。失礼します。（拍手）

※ 註

「マツカーサーにしてみれば、数年間のエンバルゴ（Oil Embargo 石油禁輸）で追いつめられていた日本が、そんなにもつはずがない」……一九四〇年前後に連合国側によって相次いで実施された対日経済封鎖を指す。石油、工業原料などの輸入がストップした。「ABC D 包囲網」として知られる。石油の対日全面禁輸は一九四一年。